心の歌を奏でて

—神の涙—　㊤

芳田尚哉

「うわっ！」
「きゃっ！」
　どこか、避難できる場所はないかっ！
　周囲をキョロキョロ見回すが、周囲に建物はなかった。水煙の向こうに、建物らしい影が見えるので、
「キヨカ、あそこに行ってみるぞ」
「うん」
　俺たちはとにかくダッシュ。
『時の口』を出ると、土砂降りだった。
　バケツをひっくり返したような……なんて事も言うけど、それよりも滝の真下にいる気分だ。一瞬でずぶ濡れになってしまい、いまさら傘をさしたところで、もう手遅れだ。あまりの雨量に、傘を差す気持ちは失せてしまった。
　大雪の次は大雨かよ……。
　どうやら、天候には恵まれていないというか、運がないというか……。
　濡れるのは仕方ないと諦めたけど、それでも屋根の下に入りたいと思うんだよ。
　重い荷物をガコガコとさせて、うっすらと見える場所を目指す。
　しかし、雨がカーテンのようになっているのと、その水煙とが合わさって、視界はほぼない。数メートル先になにがあるのかすらわからない。それでも、なんとなく見える建物っぽい場所を目指す。っていうか、それくらいしか見えないんだよな。
「トールちゃん」
「なんだ？」
　喋るだけで、口の中に雨が入ってきそうだ。
「下着ぐちょぐちょで気持ち悪い」
「言うな。俺もだ」
　ぐちょぐちょっていうか……考えると余計に気持ち悪いので、もう考えない。考えたくもない。
「とにかく、荷物は守るぞ」
「そうだね」
　せめて荷物だけでも濡れにないようにしたい。表面に撥水加工がされているが、この状況だとそれすらもほとんど無意味だろう。なにせ、海の中にいるような感覚だ。生活防水なんて、そんな状況じゃ役に立たない。明らかに許容範囲を超えてるだろう。
　それに、俺はくそ重いスパイスまで持ってるんだ。瓶なので浸水は問題ないだろうけど、やっぱり湿気るのは大問題だろう。これを台無しにするわけにはいかない。
　とにかく、荷物だけでも守らないといけないわけだ。
　俺たちはもう濡れてしまっているので、気にしていられないが、とにかく荷物だけは……。

　そのためにも、どこか雨宿りできる場所を……。
　その一心で、水煙の先を目指す。
「トールちゃん、そろそろだね」
「そうだな」
　距離がよくわからないが、おそらく見えていた場所はそろそろのはずだ。
　早く雨宿りを。
　そして着替え。
　できれば温かい風呂。
　それを心に、それを支えに走る。
　そして、息も切れてきて、そろそろ走るのもつらくなってきた時、それは見えた。
「トールちゃん」
「キヨカ」
　目の前に建物が見えた。
　だけど、白いそれは、既に建物としても姿をとどめていなかった。
　一応、屋根はあるのだが、その大部分は落ちてしまっている。
　そして、壁も崩落している箇所がある。
「とにかく、少しでも……」
「そうだね」
　今は贅沢を言っている場合じゃない。
　誰もいないようだけど、勝手に使わせてもらおう。
「すごい雨だね……」
「そうだな。ちょっと異常すぎるよな」
　なんとか雨宿りはできたが、落ち着く事はできなかった。
　それというのも、足下は浸水してしまっていて、鞄などは、少しでも上げておかないと濡れてしまう。だが、重い。特にスパイスが。
　できるだけ段がある場所を探すのだが、そういう場所で屋根がある場所というのは、なかなか見つからない。
「トールちゃん、いい場所あった？」
「ないな」
　そう言った瞬間、天井がボロリと崩れてきた。
「うわっ」
「どうしたの？」
「天井が崩れてきた」
「……マジ？」
「マジだっての」
「ここ、大丈夫なのかな？」
「……」

　大丈夫じゃないだろうな。だって、壁は崩れてるし、天井も同じだ。この状態を見て、大丈夫だとはとてもじゃないが思えない。
「ちょっと無理かもしれない」
「やっぱり、そうだよね」
　まあ、この状況で大丈夫だと思ったりしないわな。
「トールちゃん、諦めて別の場所を探そうよ」
「そうだな」
　ここはすぐに完全に崩壊してしまうだろう。そうなるとわかっていて、ここに留まる理由はない。
　戻ると、キヨカは荷物にビニールを被せていた。
「トールちゃんのもしとこうね」
　そう言って、俺の荷物にもビニールを被せてくれる。
　これで少しは濡れないだろうけど、それでもこの雨の勢いを考えると、それほど役には立たない気がする。
　やっぱり、この雨の量は異常だ。スコールなんてもんじゃないだろう。
　どう考えても、この雨は蟲(ベステート)の影響だよな。
　これが当たり前の世界って事はないだろう。
「トールちゃん、どこに行く？」
「どこったってな……」
　周囲は雨に遮られていて、なにがあるのか全くわからない。しかし、こうして建物があるわけだし、人がいるのは間違いない。もっとも、文明は存在しているのかもしれないが、もう既に誰もいない可能性があるわけだが。
　この雨の影響で、この地域を捨てて、別の場所へ移動してしまったという可能性だってある。
　とにかく、ここでまともに生活するのは難しいだろうな。
「人、いるよね？」
「……どうだろうな」
「やっぱり、みんなどこかに行っちゃったのかな」
「そうかもしれないな」
「そうだよね。だって、雨で崩れるような家って事は、ここって普段はあまり雨が降らないはずだもんね。それなのに、こんな雨が続いたら、やっぱり離れていかないといけないよね」
　そうだな。
　確かにそうだ。
　普段からここが雨の多い地域だとしたら、こんな建物は建てないだろう。やっぱり、この雨は異常なんだ。
　この状態が、どのくらいの期間続いているかは知らないが、少なくとも普通の生活はできない。現に建物は崩れている。
　雨が少ない地域の人が、この雨に対応できるとは思えない。それに、唐突に建物を建て替える

なんて、できるはずもない。
　俺だったら、この地域を捨てて、どこかに逃げるだろう。
「誰もいない可能性は高いな」
「それに、建物も全部壊れちゃってるかもだよね」
「……そうだな」
　ここのように、なんとか形をとどめているものもあるだろうが、それだって時間の問題だろう。
　やっぱり、濡れる覚悟は必要ってか。
「それにしても、なんにも見えないね……」
　キヨカは窓のようなところから、外を眺めている。
「そうだな。なんにもないな」
　ここを目指して走っていた時も、周囲にはなにも建物らしいものがなかった。植物なんかもなかった。
　そして、足元はまっ平らで、石の上を走っているみたいだった。お蔭で、移動は楽だった。だけど、特に舗装されているという感じはしない。まるで、大理石の上みたいだった。
　ここって、どういう地形なんだ？
　ある程度水は溜まっているようだけど、これだけ降り続いているのに、水は足首まであるかどうかだ。ずっと降り続いているなら、池のように――いや、この広さなら湖のようになっていても不思議じゃない。
　水はどこかに流れていっているって事か。
「ねぇ、トールちゃん。ここって山の上なのかな？　少なくても、他の所よりは高いはずだよね」
　キヨカも同じように考えてるって事か。
「だってそうでしょ。こんなに降ってるのに、全然水は溜まってないんだよ。なんとなくだけど、ここってまっ平らになってそうだし、もしかしたら、お皿から溢れるみたいに、どこかに水がこぼれていってるのかもしれないよ」
「なるほど……。それは俺も考えなかったな」
　水はどこかから川になって流れているとばかり考えていた。だけど、キヨカは少し違う事も考えていたようだ。その発想はなかったな。
「どっちにしても、ここって人がいないっぽいんだよね」
「そうだな。さすがに、ここで生活はしないだろうな」
　だねよぇ……とキヨカが呟く。

(C)2013-2014 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

「どうする？　移動するか？」
「いつかはしないといけないよね」
「そうだな」
　できれば、移動は最小限にしたい。この雨の中を、ずっと移動し続けるのは無理だ。精神的にも体力的にも疲れる。
　かといって、ここだっていつ崩れるかわからない。ずっといるわけにはいかない。
　しかし、この周囲の建物は同じ構造だろうから、ずっと滞在できる場所はないと考えていいだろう。
　そして、この場所がどのくらいの広さなのかわからない。ここを出た場合、雨を凌げる場所まで、どのくらい掛かるのかわからない。さすがに徹夜で歩き続けるのは不可能だ。この雨だとテントは張れないだろう。
　やっぱり、確実に雨を凌げる場所が、そういう建物がある場所まで行くしかない。
「行くしかないよね」
「だけど、大丈夫か？」
「大丈夫じゃなくても、行くしかないんだよね。なんなら、他の世界に移動する？」
「笑えない冗談だな」
　正直、そうしたいと思ってしまった。キヨカなら『時の口』を作って、すぐにでも移動する事ができる。この世界を見捨てて、別の世界へ向かう事は魅力的だ。だけど、そうした時点で、俺たちは全てを失うだろう。任務失敗なのはもちろんだし、俺たち自信の存在意義すらなくなってしまう。俺たちの自尊心なんて問題じゃない。
「でも、そうしちゃいたいよね」
「それは正直思った。だけど、そうするわけにはいかないだろ」
「そうだよね。ちっぽけな正義でも、私たちがきちんとしないと、この世界を救えないんだよね」
「そうだよ。俺たちしかこの世界を救えないんだ」
　別に救世主になりたいわけじゃないけど、結果的にそうなるわけだよな。
「だけどさ……もうちょっとくらい、休んでもいいよね」
「……いいんじゃないか」
　やっぱり、この雨の中に飛び出すのは心の準備が必要だ。
　そもそも、俺たちは前の世界で、蟲(ベステート)との戦闘を終えてすぐに移動した。ぶっちゃけ、疲れてるんだよな……。できれば、ゆっくりと休みたい。ふかふかのベッドがあればいいんだけどな……。まあ、この状況だとまず無理だろうな。
「だよね。私たち、ちょっとくらい休んでもいいよね」
「落ち着けそうにはないけど、正直これ以上は移動したくない」
「私も……」

　使命があるのはわかってる。急がないといけないのもわかってる。だけど、俺たちは普通の人間だ。疲れを知らない存在じゃない。
　休むのだって、重要な事だよな。
　無理をせずにしっかり休んでおかないと、いざって時になにもできなくなる。そういう時に、実力を発揮できなけりゃ、それこそ意味がない。
「ギリギリまで休憩しよ」
「そうするか」
　いつ崩れてくるかわからないから落ち着けないけど、俺たちはここで休憩する事にした。
「ねぇ、トールちゃん」
「なんだ？」
「私さ、思ったんだけどね」
「ああ」
「どこか大きな街があったらね、買いたいものがあるんだ」
「……なんだ？」
　なんだろう？　洋服とか、化粧品みたいなものかな？　やっぱ、女の子ってそういうのは気にするよな。
「保存食って必要だな……って。ヒナゲシさんたちと一緒にいて、どうして私たちはそういうのを持ってないんだろうって、そう思ったんだ」
「なるほど。そうだな」
　旅をしていれば、必ずしも人がいるとは限らない。あの世界のように、周囲になにもない世界だってあるだろう。その場でなにか食べ物を探そうにも、探せない状況だってあるだろうし、そもそも食べれるものと食べれないものがわからない。
　つまり、自分たちで用意できていないと、飢えてしまうって事だよな。飲料水は日持ちしないだろうからしょうがないとしても、なにかしらの保存食は必要だろう。
「だからさ、ちょっと荷物増えるけどいい？」
「……あ、ああ」
　それって、俺が持つのか？
　今の感じだとそうだよな。
　この状態から、さらに荷物が増えるのか。ちょっと勘弁して欲しいな……。
「よかったぁ。トールちゃんが持ってくれるなら、ちょっと多めでも大丈夫だよね」
「あ、おい、キヨカ？」
「あぅ～、そんな事考えてたら、お腹空いてきちゃったよ……」
　キヨカはお腹を押さえる。
　なんだ、このマイペースさは。
　だけど、確かに俺もちょっと腹が減ってきたかも。
「お腹空いた」
「そんな事言ったってな、なんもねぇんだよ」

「そんなのわかってるもん。だけど、お腹空いたの。なにか食べたい」
「わかってるなら言うなっての」
　そんな言い合いをしていると、俺もだんだん腹が減ってくる。なんだか、そんな歌があった気がするけど、まあどうでもいい。
「食べ物ホントになにもない？」
「ないっての。ずっとヒナゲシさんたちに頼りっぱなしだったろ」
「うぅ～。余分にもらったり……してないよねぇ。してるはずないよね」
「当たり前だ。俺たちの分で、かなり負担をかけてるのに、それ以上にもらおうなんて、思うわけないだろ」
「だよね……。そういう真面目なというか、几帳面というか、律儀というか……だよねぇ」
「お前だってそうだろうが」
「そうだよ。それのなにが悪いの。……っていうか、お腹空いたよ……」
「くそぅ。ホントになにもないのかよ」
「雪でも食べたらちょっとはマシだったかもしれないけど、さすがに雨は無理だよ……」
「水で腹を膨らませるってのもありだと思うぞ」
　俺はまだそこまでしていないが、なにか遊びまくって金欠になった大学の友達は、毎日水で凌いでいるとか、そんな事を言ってたっけ。しかも自慢げに。
　確かに水で腹は膨れるし、水分は必要不可欠だ。最悪、水でやり過ごすしかないかもしれない。
　ただ問題なのは、これだけ雨は降っていて水はあるのだが、飲む事ができるかってのが重要だ。さすがに飲料水じゃなさそうだよな。これを煮沸したり、濾過したり……そういう必要はあるだろう。だけど、俺たちにそんな設備はないぞ。
　……いや、卓上のガスコンロと小さな鍋はあった気がする。それで煮沸してみるか。
「キヨカ、とりあえず水で凌ごうぜ」
「だから、ちゃんと固形物がいいの。水でお腹が膨れるのはわかるんだけど、後でむくむから却下なの」
「そんな事言ってもな、今はなんにもないんだよ。だったら、水で誤魔化すしかないだろ」
「トールちゃん、ついに言っちゃったね」
「なにがだ？」
「誤魔化すって。姑息だね」
「確かにその場凌ぎかもしれないが、それだってしょうがないだろ」
「開き直り？　うっわぁ、トールちゃんが開き直っちゃったよ」
「なんでもいいだろ。とにかく、俺は試してみるぞ」
「やめようよ。ガスの無駄だって。ここの水、それくらいで飲めるとは思えないよ」
「どうしてだよ」
　試してもないのに、どうしてそんな事が言える。確かに清潔じゃないかもしれないけど、そんなの俺たちの世界だって同じようなものだ。日本は比較的綺麗だけど、他の国に行けば水道水を

直接飲むなんてできやしない。それに、川の水を生活に使っている地域だってある。それを考えれば、こんな雨水くらいたいした事ないだろ。
「とにかく、沸騰させたって飲めないよ。まあ、降ってるのを直接すれば、まだわからなくもないけど、下の水は絶対に無理」
「なにを根拠にそんな事……」
「じゃあ、ちょっと舐めてみなよ」
「おいおい、そのままなんてできるかよ」
「そのくらいじゃ死なないよ。……多分」
「……すっげぇ、間があったぞ」
「とにかく、飲めないんだって」
「お前、矛盾してないか？　飲めないって言う水を、ちょっと舐めろって。それってどうなんだ？」
「だからそうじゃなくて、飲もうと思えば飲めるかもしれないけど、とにかく無理なんだって」
「わけわからん」
「とにかく舐めてみろ」
「んぐっ」
　そう言って、キヨカは自分の指を水に浸け、それを俺の口にねじ込んできやがった。
　結果的に、俺はキヨカの指をくわえているという事になるわけだ。
　なんというセクシャルな状況だろう。
　まあ、キヨカの方から突っ込んできたわけだし、それで俺が責められる事はないはずだ。

(C)2013-2014 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

「……んげぇ」
「どう？　無理でしょ」
　コクコクと頷く。
　キヨカはちゅぽっと指を抜いた。
「これは無理だ」
　キヨカが言うように、確かにこれを飲むのは無理だろう。
「なんだ、これ。すっげぇしょっぱい」
　海水なんてまだ薄いと思えるくらい、かなり濃い濃度の塩水だ。飽和食塩水ってこういうのだろうか。実験なんかをしても、それを舐めるなんてしないしな。まあ、あれは食塩だからいいんだろうけど、これはそういう精製されてないものだし、美味しさなんて微塵もない。
「お前、どうしてこれが塩水だって……。ここは高台というか、山の上っぽいだろ」
「そんなの知らないよ。でも、これが塩水だってのはわかるよ」
「だから、どうして」
　キヨカは自分でなにを理解してるのかわからないけど、そういうのを省略されると困るんだよな。
「そんなの簡単に想像できるよ。この建物、全部塩でできてるよ」
「……マジで？」
　確かに白い建物だ。だけど、これが塩だなんて……。そもそも、塩で家を建てるなんて、想像もできない。
「ちょっと舐めてみたら、塩だったんだもん。きっと、他の建物もこれと同じだったんじゃないかな。だったら、崩れた建物の塩が、水に溶けてるはずでしょ。だったら、簡単に想像できるでしょ」
「……そうだな」
　この建物が塩だとわかれば、他の建物も同じだと想像できる。これが崩れていっているわけだから、崩れた塩が溶けてるというのも想像できる。
「だから、こんな水はとてもじゃないけど飲めないよね。そもそも、この雨だって蟲(ベステート)が降らせてる可能性もあるわけだし、そんな水を警戒せずに飲むなんてできないよ」
　そうだった。この雨だってまともじゃない。蟲(ベステート)の影響で、この世界の自然の摂理が異常をきたしているにしろ、この世界の自然の一部として降っているなら、まだそこまで警戒する必要はないだろう。だけど、これを蟲(ベステート)が直接降らせている場合は、飲むなんてとんでもない……って、さっきちょっとだけ舐めちゃったじゃないか。
　ぺっぺっと少しでも吐き出そうとする。しかし、既に遅いよな。それはわかっているけど、それでも……わかるだろ？
「トールちゃん汚い。やめてよ」
「そんな事言ってもだな、さっきお前に舐めさせられただろ」

「だから、そのくらいだったら大丈夫だって。まあ、なにかあったら、その時はその時だよ」
「……てめぇ、自分の事じゃないと思って……」
「そんな事ないよ。私にはトールちゃんが必要だもん。トールちゃんがいないと、私は元の世界どころか、他の世界にだって行けないんだよ。なにもわからない世界で、一人で暮らしていくなんて、絶対に無理だよ」
　合理的というかなんというか……。ちょっと打算的かもしれないが、俺の重要性としてはほどほどにあるってわけだよな。この程度で喜んでる場合じゃないけど。
「はぁ～。お腹空いた」
「……言うなよな」
　言わなけりゃ、ちょっと忘れかけてたのに。思い出すと、余計に腹が減ってくる。
「こんな水質だったら、魚だっていないよね」
「そりゃそうだろ」
　こんな濃い塩水の所に、生物がいるとは思えない。
　俺たちの世界にだって、詳しい場所は忘れたけど、塩の濃度が高すぎて死海って呼ばれてる場所があったよな。そこって、人が簡単にぷかぷか浮くんだよな。
　ここもそれと変わらないくらいなんだろうな。想像だけど。
　それ以前に、水深が浅すぎて魚なんて元々いないだろうな。
「トールちゃん、なにか食べるものないの？」
「さっきも同じ事言わなかったか」
「もう一度なにか探してみようよ」
「ねぇよ。あったら食べてるって」
「でも、もう一回探してみてよ」
「ないと思うんだけどな……」
「ほら、探してみようよ。なにか見落としてるかもしれないでしょ」
「それはないだろうけどな」
　そもそもそれほど荷物は多くない。その中に、食べ物はなにもない。
「……うぅ～。食べれそうなのはないよね」
「だから言っただろ」
「食べ物というか、スパイスはあってもさ、それだけだと無理だよね」
　そうなのだ。唯一、食品といえるのが、この大量のスパイスだ。確かにこれは食べ物に分類されるだろう。だけど、これを単体で食べれるかと問われると、それは難しいと答えざるを得ない。
　食品なのに食べれないなんて、これはこれで切ないな。
「ないってわかったら、余計にお腹が空いてきちゃったよ……」
「莫迦め」
　キヨカもそうだけど、自分に対してもそうなんだよな。
「ちょっと自分でもそう思うよ。どうして、私たちってこうなんだろうね」

「所詮は素人だからな。きちんと旅の準備ってのができてなかったんだろうな。意識も不足してたんだろうぜ」
「……正論は言わないで」
「正論っていうか、事実だしな」
「だから言わないで。言えば言うほど、自分が惨めになっちゃうよ」
「惨めって……。そこまでか？　そんなに思い詰めるような事でもないだろ」
「落ち込むよ……」
　そんな事してる場合じゃないだろうに。
　っていうか、キヨカも落ち込んだりするんだな。当たり前か。こいつだって、普通の女の子だもんな。
「はぁ〜、お腹空いた」

(C)2013-2014 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

「なぁ、これからって、どんな世界があるんだろうな」
　空腹からしばらく黙って座っていたが、さすがに沈黙がつらくなって、なんとか話題を……と考えて、出てきたのがこれだった。
　我ながらどうなんだろうと思うけど、他に話題になりそうなものがないんだよな。
　なにせ、一ヶ月以上二人で一緒に旅をしているわけだから、共通する事を話すしかないよな。
「そうだね……。どんな世界があるんだろう」
　およ？　意外とキヨカが話に乗ってきてくれた。
　まあ、気になる話題ではあるけどな。
「でも、どこも平和じゃないよね」
　すぐに重くて暗い話になっちゃうよな。
　確かに蟲(ベステート)の影響があるから、なにもない穏やかな世界とはいえないだろう。
「でもさ、あの着ぐるみに見える世界みたいにさ、それほど深刻じゃない世界だってあるかもしれないだろ」
「それはそうだけど……」
　あの程度なら、まだ平和な方だろう。実際、その世界の人たちは、それほど違和感もなかったようだし、俺としても、思い返してみればそれなりに楽しかったと思える。もっとも、そこで巻き込まれた事に関しては、笑えないんだけど。
「ほのぼのしてたし、色んな着ぐるみがあって、ちょっと面白かったけどさ……」
「そうだよ。あの世界でさ、お前は全部の動物がわかってたけど、どこでそんなの知るんだよ」
「？　どういう意味？」
　キヨカは首を傾げる。まあ、言葉足らずだったかもしれないな。
「あの世界の着ぐるみってさ、種類が多かっただろ」
「そうだね」
「しかも、マイナーな動物が多かっただろ」
「マイナー？　例えば？」
　おいおい、こいつは……。
「例えばって……」
　えっと……。
　あまりにマイナーすぎて、ほとんど覚えてないぞ。
「例えば？」
「例えばだな、俺のオカピとか、お前のハリオアマツバメとかだな……」
「そうかな？　マイナーかなぁ？　みんな知ってるでしょ？」
「……」
　自覚なしかよ。
「他にもガラパゴスペンギンとか、えっと……アマゾンカワイルカとか、誰も知らないっ

ての」
「そんな事ないよ。絶対みんな知ってるって。トールちゃんが知らないだけでしょ」
「違うっての。俺はかなり一般的だぞ。お前が知りすぎてるんだっての」
「自分が無知なのを棚に上げて、それはどうかと思うよ」
「違うっての」
「誰でも見たらわかるのに。トールちゃんってば、大袈裟じゃないかな」
　大袈裟なわけあるか。
　帰ったら、訊いてみても……って、いやいや、知ってそうな人たちばかりが思い浮かんだ。これじゃ証明できない。……もしかして、俺の周囲って……。なんだか、凹むな。
　いやいや、ちょっと俺の周囲に特殊な人が集まってるだけで、普通は俺の方だ。
「楽しい世界だったけど、やっぱりいい思い出はないよね」
「……そうだな」
　着ぐるみ自体は、ちょっと面白かった。だけど、やっぱりあの世界にもう一度行ってみたいとは思えない。やっぱり、あの事件の印象が強いんだろう。誰しも裏切られたいわけじゃない。
「そういえば、回転寿司ってどうなったのかな」
　唐突に話題を変えやがった。
　でも、それは俺も気になっていた。……といっても、毎日のように思い返していたわけじゃない。正直なところ、今の今まで忘れていたくらいだ。だけど、気になっていたのは事実だ。
「そうだな……」
　天井を見上げる。
「そろそろ、完成してるかもな」
　実際、どのくらいの期間で、商業ベースで稼働できるようになるのかわからないが、あれだけのペースなら、そろそろ実際に店舗に出しているかもしれない。
「そうだね。そんな気がするよ」
「でもさ、まだあれから一ヶ月も経ってないんだけどな」
「そうだね。でも、やっぱりそんな気がするよ」
「……俺もだ」
　色々とありすぎて、ずっと昔の事のように思えるが、まだ一ヶ月も経っていないはずだ。……ちょうど一ヶ月くらいかな。
「……って、もうそんなに経ってるのか」
　改めて考えると、昔に思えるほど時間は経っていないかもしれないが、旅のペースから考えれば、もう一ヶ月も経ってるって事だ。あの世界にいた期間を考えれば、出発から一ヶ月半は経っている事になる。
　それだけの時間を使いながら、まだ封印できた蟲(ベステート)は三体。
　半月ペースだと、まだ半年くらいは必要って事になるよな。
　半年も休学すると、留年もするだろうよ。
「なあ、やばくないか？」

「……なにが？」
「なにがって、学校だよ」
「……はっ」
　それでようやく気付いたか。
「トールちゃん、私たち、一ヶ月以上かけて、まだ五分の一くらいだよね」
「えっと……」
　そんなもんだったっけ。
「そうだよ。封印しなきゃいけないのが一四。それで、封印できたのが三。一四分の三。だいたい五分の一くらいだよね」
「……そうだな」
　実際に、数字として考えると、まだまだほど遠いな。
「まだ一一だよ。このペースだったら、元の世界に戻る頃には春だよ。卒業式に間に合わないよ。……っていうか、入試はどうしたらいいんだろう」
　そっか、それもあったな。
　留年もそうだけど、キヨカの場合は最高学年なわけだし、卒業ってもんもあるよな。さらには、入試も。それをどうするかってのも問題か。
　仮に、式に間に合わなくても、卒業はできるかもしれない。だが、入学は可能だろうか。入試を受ける事ができないわけだから、それは絶望的だろう。
　俺の進級と同じくらい、絶望的な状況だ。
「トールちゃん、もっと急ごうよ」
「わかってるよ。今考えて、やばいと思ったから言ったんだろうが」
「どうしよう、どうしよう」
　焦ってみたところで、事態はなにも改善しない。
　俺たちの意思だけで、どうこうできるもんじゃない。
　ここを早く通過すればいいってんだったら、寝る間も惜しんで急ぐだろうよ。
　だけど、俺たちの旅は、蟲(ベステート)に影響されまくっている。
　もっと早く見つけ出して、封印しちゃえばいいんだろうが、それもまた難しい。
　蟲(ベステート)がどこにいるのか、それがわからないんだからな。
　この広い世界で、俺たちは蜘蛛(アラネーオ)の力もあって、蟲(ベステート)がいる近くに出る事ができるが、それでも近くってだけだ。実際の位置は、自分たちで探すしかない。
　急ぐにも限界がある。
　そもそも蟲(ベステート)が姿を現してくれないと、どうしようもない場合だってある。
「落ち着け。とにかく、落ち着こう」
「そうだけど、落ち着けないよ」
「わかってるって。俺だって、同じようなもんだぞ」
「それは違うよ。絶対に違う」
「なにがだよ。俺だって、留年の危機だっての」

「それが違うんだよ。わかってないよ、トールちゃんは」
「どういう事だよ」
　キヨカは出席日数の関係で、俺に関しては取得単位の関係で、お互いに留年の危機だろうが。確かに、ちょっと理由が違うかもしれないけど、結果的に同じはずだ。同じ学年を繰り返すわけだ。
「大学と高校じゃ、留年の重みが違うんだよ」
「……一緒じゃねぇの？」
　どっちも変わらないように思うんだけどな。留年は留年だろ。
「違うよ。大学だったら、一浪して入学したりとかあるから、新入生だったり、同じ学年でも違う歳ってのはあるかもだし、割と日常かもしれないけど、高校はそうじゃないんだよ。トールちゃんも、この前までそうだったんだからわかるでしょ」
「……そうかもしれないな」
　確かにキヨカの言うとおりだ。
　大学だったら、講義によってメンバーも違ったりするし、高校のような何組というようなクラス分けがあるわけじゃない。
　同級生に年上だって普通にいる。ほとんどは同い年だけど、やっぱり年上はいる。
　大学だったら、確かに日常かもしれない。
　だけど、高校で同じ事は……。
　きっついな。
　留年なんて、実際のところほとんどない。俺が知っている中には、そういうやつはいなかった気がする。学年の全員を知ってるわけじゃないから、もしかしたらいたのかもしれない。
　……そういや、入学した時と卒業した時だと、少し減っていた気がするな。
　別に神隠しとかじゃなくて、中退したって事なんだろうけど。
「すまん。キヨカの言うとおりだな」
「でしょ？　わかったでしょ。私の方が深刻なんだよ。高校で留年すると、居づらいんだよ。だから、だいたい留年したらそのまま中退だよ。私、そんなのいやだよ」
「まあ、いいもんじゃないよな。だけどな、俺にだって、どうする事もできないっての」
「どうしたらいいんだろう。神様がなんとかしれくれるのかな」
「どうだろうな」
　社会への影響力を考えれば、そういう事もできるかもしれない。
　とんでもない裏口入学っぽいけど、ある種の推薦入学にもなるわけだ。
　中途なので、編入って事になるのかもしれないが。
　いやいや、そういう問題じゃなくてだな。
「だけど、それはそれで難しいんじゃないかな」
「できるよ、きっと」
「まあ、根拠がないわけじゃないし、できそうだけど……」
　やっぱり難しいんじゃないかな。

「神様って、人を作り出す事と、見守る事と、大気を動かす事しかできないって思ってたけど、それはあくまでも宗教的な神様だもん。神様だけど、神崎(かんざき)璃織魚(りおな)さんは人間だよ。それも、私たちと変わらない年齢だし」
「それ、なんか関係あるのか？」
　宗教的な神様じゃなくて、実際に影響力があって、それを行使できる存在だってのはわかるんだが、年齢はなんの関係もないだろ。むしろ、俺たちと同じくらいだったら、貫禄というか、頭の堅い年寄り相手に、どこまでできるか。若いからと軽く扱われたりしないだろうか。
　……いや、それはなさそうだな。あの神様のオーラのようなものはすごかった。
　……といっても、俺は最初普通に話したりしてたわけだけど。
　つまり、そういう神様然としたオーラもあるのだが、普通の女の子でもあるわけだ。
　それって、やっぱり不安かも。
　いやいや、周囲にいる人たちが、なにかとしてくれるかもしれない。
　椎崎(しいざき)さんなんて……あの人は、俺たちの自業自得だとかで、わざと手を貸さなかったりしそうだな。
「俺、もう諦めようかな」
　頭を抱えてしまう。
「トールちゃん、私、高校中退したら、どうしたらいいのかな」
「早まるな。まだ決まったわけじゃない」
「卒業は難しいかもだよ。できれば、私の経歴に〝留年〟ってのもつけたくないんだよ。学生生活は、ストレートにいきたいんだよ。
　最近だと、一浪とか二浪なんて、それほど気にする事じゃないのかもしれないけど、それはあくまでも周囲が勝手に思ってるだけだよな。本人にすれば、これ以上ない大問題だ。
「キヨカ。ここで嘆いていてもしょうがない」
「トールちゃん。現実逃避はよくないよ。いい事言ってる気になっても、現実はそうじゃないんだよ」
「……」
　わかってるけど、わかりたくない。つうか、どうして俺は、キヨカに諭されてるっぽい感じになってるんだ？　まあ、いいけど。
「でも、私だってそうだよ。急ぎたいんだけど……」
　キヨカは外を見る。壁はほとんど崩れてしまっているので、どこからでも外を見る事ができる。かろうじて、雨が吹き込んでこないのが救いだ。
「こんな状況だもんね」
　外は相変わらずの雨だ。
　豪雨っていうか、よくこれだけ降り続くなって感じだ。
　呆れてくるっていうか、自然の驚異に感心さえするね。
　蟲(ベステート)の影響でも、それは自然の力なのかってのはよしとしておこう。
「止まないよね」

「蟲(ベステート)の影響だしな」
　この雨は蟲(ベステート)の影響だろうし、そうだとしたら封印するまで止まないだろう。
　だけど、こんな状況の中、蟲(ベステート)を探して移動するのは困難だ。っていうか、探したくない。
　できれば雨が止むまで待ちたい。
　だけど、そのためには蟲(ベステート)を封印しないといけない。
　なんという堂々巡りだ。
　しかも、ゆっくりすればするほど、俺たちの人生がピンチになっていく。主にキヨカの方が精神的には重傷っぽい。だからって、俺だってきっついんだよな。
　どのみち、矛盾しちまうんだよ。
「この中、移動するのって大変だよね」
「そりゃ……な」
　乗り気じゃないのは同じだ。
「もうちょっとだけ、雨宿りしてようか」
「同感だ。だけど、そのせいで留年が近付くぞ」
　ちょっと意地悪をしてみる。
　するとキヨカは、うぅっと頭を抱え込む。
「すまんすまん。冗談ってわけじゃないけど、悪かったって」
　そんな風にされると、なんだか調子が狂うんだよな。とにかく謝っておくのがいいと思ってそうするけど、キヨカはずっと頭を抱えている。
「おい、キヨカ……」
「ちょっと黙ってて。雨に濡れるか、留年するか。今をとるか、未来をとるか、それを考えてるんだから」
　……マジか。
　キヨカのヤツ、かなりマジに考えているのか。
　まさか、そんな真剣に考えてるなんて……。いや、ちょっとどうなってもしょうがないと思ってしまってる俺がおかしいのか。
　一浪した気分で……って、そんな気分になれないんだけど、そういう感じでなんとかなるって思ってるのか？　いやいや、俺だって留年は勘弁だ。
　つっても、ゼミの教授は完全に単位をくれないだろう。なにせ、ずっとゼミに出席してないからな。
　それを誤魔化すためのレポートも、とてもじゃないが提出できるような内容じゃなくなった。
　最初の世界の事くらいなら、なんとかレポートにできそうだったが、あの着ぐるみに見せる世界以降、とてもじゃないが、他の誰かに話して信じてもらえるような気がしない。
　それでも一応書いてるのは、自分自身の記録のためだ。それに、もしかしたら神様たちだって、どんな世界だったのか、どんな旅だったのか知りたいだろうし、訊かれるかもしれない。その時のために、とりあえず記録はしている。

……って、どんどん話が脱線してるよ。
なんだったっけ？
留年の危機は……これは、常に考えるよな。なんだか、どの世界に行っても、これを考えてる気がする。なにか煮詰まったら、留年の話をしている気がする。
これはこれで大事だが、それはそれとして……この雨だ。
この雨の中、とてもじゃないが蟲(ベステート)を探しに行こうなんて考えられない。
仮に濡れてもいいとして、外に出たとしても、雨の水煙のせいで、視界はほとんどない。霧の中にいるような感じだ。
全くといっていいほど見えない状況で、どうやって探せっていうんだ。見えた時には、既に目の前だ。そのくらいの距離じゃないと、とてもじゃないが視認できない。
結局、俺たちはここで雨宿りしているしかないんだろうか。
だけど、ここだっていつ崩れるかわからない。
ーーーーーーああ、思考の無限ループだ。
結局、同じ事になってる。
同じ事をぐるぐる考えてるだけだ。
会話だって、何度もした気がしてくる。
ちらりとキヨカを見ると、まだ頭を抱えている。
ちょっと考えすぎな気もしてくる。
だけど、キヨカにとっては、それだけ重要な事なんだろう。

(C)2013-2014 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

〝我　蟲(ベステート)を発見せり〟
　沈黙を破ったのは、蜘蛛(アラネーオ)の声だった。
「ホント？　ホント？」
　願った展開ではあるものの、思わぬ展開に思わず動揺してしまう。
「トールちゃん、行こう」
「ああ」
　行かないという選択肢はない。
　しかしーー
　外を見る。
「トールちゃん、い、行くよ」
　外の状況を再認識すると、やっぱり躊躇しちゃうよな。
「わかってるって。俺たちはそのために旅をしてるんだしな」
　ここでカッコつけるなら。キヨカはここで待っていろ、とでも言えばいいんだろうけど、蜘蛛(アラネーオ)を使役できるのはキヨカだけだ。
　むしろ、俺がサポートなわけで、キヨカだけでも対処しようと思えば……できなくはない。
　それがなんだか悔しいんだよな。
「よし、行こう」
　この状況だと、やっぱり気合いを入れ直さないと、一歩を踏み出せそうにない。
　俺たちは顔を見合わせて頷く。
　そして、荷物を持って雨の中に飛び出す。もちろん、荷物は可能な限りビニールで巻いて、防水処理をしている。だけど、それでもこの雨だと不安だ。
　この屋根のある場所で、荷物だけでも置いておきたいけど、やっぱり荷物を誰もいない遠くに置いたままにするのは不安だ。
　戦いにくいのはわかってるんだけど、そこはキヨカが荷物番をしてくれるだろう。
「うわぁ、ぐしょぐしょだね」
「ああ」
　荷物の防水はなんとかしたものの、俺たち自身はなにもしていない。
　というのも、俺は動かないといけないので、合羽でも邪魔になってしまう。だから俺はいいんだ。
　せめてキヨカだけでも、合羽を着ればいいものを、俺が着ないなら自分も着ないとか言い出すんだから、どうしたもんだろう。
　確かに自分だけってのはイヤなのかもしれないけど、キヨカの性格なら自分だけってのも充分あるんだけどな。
　その気持ちは嬉しいんだけど、申し訳なくもある。こいつはこいつで、そういうとこは律儀っていうか、頑固っていうか……。とにかく、真面目なんだよな。

　そんなわけで、俺たちはびしょ濡れというよりは、ぐしょ濡れ状態になっていた。
　いっその事、水着でもよかったんじゃないか？
　そう思ったが、気付くのが遅かったようだ。っていうか、水着って持ってたっけ？　あったら、今度こういう事があったら提案してみよう。持ってきた覚えはないんだけどな。
「アーちゃん、どっち？」
　キヨカは蜘蛛(アラネーオ)に方角を訊きながら走っていく。俺は、それを頼りについていく。
　なにせ、この雨のせいで視界が悪い。ほとんど見えないんだから、目印もなにもない。とにかく進むだけだ。
　幸いな事に、地面は比較的平らだって事だろうか。
　これがどこまで続いているのかわからないけど、まだ大丈夫そうだ。
　もし、崖なんかがあったら、俺たちは完全ダイブする事になっちゃうよな。そうならないように祈ろう。変なフラグは立てないでおこう。
　とにかく、濡れながら、荷物を引っ張りながら走り続けるのは、かなり体力を消耗する。
　雨ってこんなに大変なんだな。
　たかが水だって思うけど、その水が大変なんだよな。それに怖い。
　水の恐ろしさってのを、少しだけど実感できた気がする。
「トールちゃん、大丈夫？」
「なんだ？」
　雨のせいで声が聞き取りづらい。大声で叫んでも、雨の音にかき消されてしまう。
「トールちゃん、大丈夫なの？」
　今度は聞こえた。
「ああ、大丈夫だ？」
「なに？　聞こえない！」
　……ったく。どうやら、今度は俺の声が聞こえないってか。
「大丈夫だ！　問題ない！」
「そっか。アーちゃんがね！　もうちょっとだって！」
「そっか！　わかった！」
　走りながら叫ぶだけでも、かなり疲れる。
　さっきから、俺たちって体力を消耗しまくってないか？
　こんな調子だと、蟲(ベステート)と戦う前に倒れてしまいそうだ。
　雪の世界で、多少は修行して、体力もなんとか保つようになった気がしたけど、やっぱりまだまだだな。たったの数日で、そんな見違えるほどにはならないよな。
「キヨカこそ！　大丈夫なのか！」
「大丈夫に！　決まってるでしょ！」
　そうか。それはよかった。
　ったく……。こいつはホントにタフだよな。
　普通、こんな状況で、全力ダッシュすれば、その場に倒れ込みたくなるってのに。こんなに走

れるのってマラソンの選手くらいじゃないか？　駅伝とか、そういうのをしてる人たちくらいだろ。
　まあ、俺だってこの状況で走ってるわけだけど。
　それでも、そろそろダウンしそうだ。このままだと、完全に倒れる。息が上がってきているのがわかる。
「はぁ、トールちゃん、頑張って……はぁ」
　キヨカもそろそろ限界のようだな。むしろ、ここまで走れたのがすごい。
　かれこれ、五分くらいは全力ダッシュだ。この状況だと、かなりすごいんじゃないだろうか。
「トールちゃん……。もう見える頃みたい。あっ」
　キヨカは足をもつれさせて転ぶ。
「おい、大丈夫か？」
　駆け寄って、キヨカに呼びかける。キヨカは前に倒れるように転んだので、顔面から地面に突っ込んでいた。まあ、さすがに受け身はとったみたいだけど。
　それでも、無傷ってわけにはいかないだろう。
　できれば、俺もここで倒れ込みたい。
　っていうか、止まって気付いたが、もう足が棒のようだ。感覚がほとんどない。マラソンもそうだけど、一度止まってしまうと、疲れが一気にきて、もう走れなくなってしまう。

(C)2013-2014 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

「トールちゃん、ごめんね。私、ちょっとこのまま休む」
「……ああ、休んでろ。ちょっと、荷物番頼む」
「……わかったよ」
　キヨカはもう動けないみたいだ。そりゃ、これだけ走ったんだ、当然だろう。
　俺だって、ここで休みたいのは山々だけど、そこは男の子だ。意地ってもんがある。そういうのが男の子だろ。
「ちょっと行ってくる」
　このまま、雨ざらしにしておくのもどうかと思うが、今の俺にはなにもしてやる事ができない。かっこよく、上着でも掛けてやれればいいんだけど、前進濡れ鼠状態の俺に、なにがしてやれるってんだ。
　すぐに戻ってくる。
　俺にできるのは、できるだけ早く戻ってくる事くらいか。
　そうだ。
　俺は荷物の中から、折り畳みの傘を取り出す。
　走ってる時は邪魔だし、今更差しても意味ないくらい濡れてるけど、それでも……。
「すぐに戻ってくるから、ちょっと休んでろ」
　その傘をキヨカに差してやる。地面に立てかけておけば、少しくらい雨を凌げるだろう。まあ、地面が水浸しってのは、この際考えないようにしよう。
　とにかく、一刻も早く蟲(ベステート)を倒さないと。封印するのは、その後でもいい。
　このとても広い場所で、蟲(ベステート)を見失ってしなえば、次はいつ見つかるかわからない。見つける事ができた今、なんとしてでもやるしかない。
　蜘蛛(アラネーオ)はこの辺だと言っていたらしい。
　それなら、この辺を調べればいい。
　どんな姿をしていて、どんな大きさなのかわからないけど、俺たち以外のなにかがいたら、それは蟲(ベステート)だろう。
　どこだ。どこにいる。
　雨の音でなにも聞こえない。
　雨の水煙でなにも見えない。
　それでも、なんとか感じるんだ。
　音もなく、視界もなく……ただ感じる事しかできない。
　蟲(ベステート)の気配を感じろ。
　どこだ。
　どこにいる。
　どこにいるんだ。
　早くしないと、キヨカが……。

キヨカをあのままにしておくわけにはいかない。
どこかで、ちゃんと休ませてやりたいし、そもそも俺自身がゆっくり休みたい。
一人でなんとかできるか？
いいや、なんとかするしかない。
出てこい。
早く出てこい。
風伯(ふうはく)を抜いて構える。
そうだ。キヨカがいないと、俺はまだこいつの力を出し切れない。
どうしよう。
いや、キヨカに頼ってばっかじゃダメだ。自分だけでなんとかできるようにならないと。
目を閉じて風を感じる。
……って、この雨の中、その風を感じるのが難しい。集中しようとしても、雨が気になってしょうがない。
集中しろ、集中しろ。
そうだよ。雨だって音楽だ。音なんだ。
この音を感じて、そのまま心の中にある音を感じるんだ。
心の中にある、キヨカの音楽。キヨカの音、キヨカの歌を感じろ。
その音を感じて、俺が奏でるんだ。
キヨカの歌を奏でろ。
風伯を自分の一部だと感じろ。
さあ、風よ舞え！
風を感じろ！
風を纏え！
風をイメージしろ。
俺は今までだって、風伯を使ってきた。一緒に戦ってきた。こいつは俺の相棒だ。
風伯と一体になれ！
今まで戦ってきた事を思い出せ。
風伯はどうだった。俺に応えてくれていた。
だったら、俺は風伯を信じよう。俺が信じなくてどうする。俺が信じれば、風伯だって応えてくれるはずだ。
「うぉぉぉぉぉっ！」
気合いだ、気合いだ、気合いだぁっ！
俺の中の力を、全部風伯に注ぎ込むイメージ。
そのイメージに合わせるように、風伯の周囲に小さな風が。
よしっ。
この風を逃すな。
この風を大きくするんだ。

風を感じて、風を奏でて、風を纏う。
「よし、いける」
カッと目を開ける。
風伯は、風を纏っていた。
「できた……」
なんだか、それだけで体から力が抜けるようだった。
まだ準備ができただけなのに。
だけど、これがとてつもなく嬉しかった。
「一人で、できたんだ……」
キヨカの補助なしで、一人で初めて風伯の力を出す事ができた。
「よし、こっちは準備ができた。あとは蟲(ベステート)だ」
これで、いつ蟲(ベステート)が現れても大丈夫だ。風伯が一緒に戦ってくれる限り、俺は蟲(ベステート)と戦う事ができる。
「それにしても、相変わらずだな」
風伯が風を纏ったといっても、周囲の状況はなにも変わっていない。
俺はひたすら雨に打たれてるし、雨音でなにも聞こえない。水煙でなにも見えない。
どこにいるんだ？
ホントにどこにいるんだ？
っていうか、ホントにいるんだよな？
まあ、蜘蛛(アラネーオ)がいるって言うんだから、それは間違いないだろう。
緊張する。
どこから来る？
っていうか、向こうから来るとは限らないのか。
逃げるなよ。
俺たちに気付いて、逃げられたりしたら最悪だ。それだけは避けたい。つうか、やめてくれよ。
まだ近くにいるよな。

(C)2013-2014 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

「っ！」
　なんだ？
　なにかが動いた。
　なにかはわからないけど、今までとは違う水音がした。
　少しだけだけど、なにかが雨を遮っている。
　今まではなかったから、動くものだ。
　俺たち以外の動くものといったら、蟲(ベステート)しかいない。
　いる。
　蟲(ベステート)が近くにいる。
　しかし、足下も水浸しなのに、それらしい音がしない。
　試しに一歩動いてみると、ぱしゃっと音がする。
　余程静かに動いているのか？
　だけど、そんな事を蟲(ベステート)がするだろうか。そんな知能があるのだろうか。
　蟲(ベステート)はそういう知能はなくて、本能で活動しているイメージがあるんだよな。だから、俺を攪乱するような知恵はなくて、ただの本能なんじゃないだろうか。
　まあ、それを自然と当たり前にされたら、それはそれで厄介だけどな。
　ーーまただ。
　また、なにかが動いた。
　どうなってるんだ？　音がしない。ただ、雨が当たる音が変わったから気付いただけだ。それがなければ、なにも気付かない。
　気配なんか、とてもじゃないがわからない。
　じわじわと、追いつめられている気分だ。まだなにもされてないのに、追いつめられている感がある。
　なんだ、このプレッシャーは。
　こんな風に心理戦を仕掛けてくるなんて、どうなってやがるんだ。
　俺のイメージとは違って、蟲(ベステート)にもはっきりとした知能があるんだろうか。それで、俺を疲弊させようと、こうして見えない圧力をかけているんだろうか。
　だとしたら、かなり手強い。
　ちくしょう……。ヒナゲシさんたちの協力があったらな……。
　あの人たちと、ずっと一緒に旅ができたら、どれだけ心強いか。
　って、どこまでも俺ってヘタレだな。誰かに頼ってばっかだ。
　どれだけ、同じ事を繰り返せばいいんだよ。
　ピンチになったら誰かに頼って、その度に自己嫌悪して……。他の事だって、ずっと繰り返してばっかだ。
　旅に出てから、なにも進んでいない。なにも成長していない。

　こんな俺から卒業するためにーー
「さあ、やってやる」
　俺はそんなのに負けるわけにはいかないんだ。
　早くキヨカの元に戻らないと。
　キヨカをこの雨の中、そのままにしておけない。
　感じろ。
　集中しろ。
　近くにいる。
　俺の傍に来い。
　どこにいるんだ。
　俺が倒してやるよ。
　かかってきやがれ。
「ーーーーーー」
　心を澄ませろ。
　音にだけ集中しろ。どうせ見えないんだ。唯一わかるものを頼るしかない。
　キヨカくらい耳がよければ、少しは有利だったんだろうけど、俺にそんな事はできない。
　だから、精一杯耳を澄ませる。
　音の違いに注意する。
　少しの違いを聴き取るんだ。
　雨の音が動く。
　ゆっくりじゃない。なんだ、この速さは。速い。とてもじゃないけど、追いつけそうにない。
　速すぎて音が流れていく。
　そうか。
　そのせいで、さっきまで気付けなかったのか。だとしても、この速さは尋常じゃない。人が対応できる速さなのか？
　さすがに姿を見る事はできるだろうけど、速すぎて風伯で対抗できそうにない。
　ここにきて絶望感かよ。
　どうなってやがるんだ。
　ここで怯んでどうするんだ。
　だけど、音だけだととてもじゃないけど……。
　いや、まだ音だけだ。
　実際はどうなんだ？　見たわけじゃない。
　泣き言は、実際に対峙してからだ。その前に怯んでどうするんだ。
　目を凝らせ。
　じっくりと見るんだ。
　音からするに、そんなに遠くない。
　水煙の向こうに、シルエットくらい見えるはずだ。

見つけるんだ。
蟲(ベステート)は近くにいる。離れていっていない。だったら、確実に仕留めるんだ。
目に頼りすぎるな。
耳を頼れ。
さあ、見つけてやる。
どこだ。
どこだ。
どこだ。
すぅーっと水の音。
流れるような音。
「こっちか」
音が向かう方向に風を放つ。
こうなったら、勘だよな。
勘に勝るものなし。
蟲(ベステート)が移動するであろう場所を予想して攻撃する。
今の俺には、それしか考えつかない。
これだって、どこまで通用するかわからない。だけど、今はそれしかできない。
どうだ？　当たったか？
耳を澄ませる。
……。
流れるような音は、まだ続いている。
外れた。
違う。外された。
音は、俺が思っていた方向とは、違う方から聞こえてくる。
どうやら、俺の攻撃に気付いて方向を変えたのか。
蟲(ベステート)もただ移動しているわけじゃないってか。
攻撃を察知するくらいはするのか。
だけど、逃げないのはありがたい。まだ音は近い。
今度こそ……。
逃げられないように、逃げる場所がないように。
耳を澄ませて、場所を推測して、そこから行動を予想して……。
全方位に風を放つ！
音の方に向かって、風を連発。
とりあえず、数打ちゃ当たるってとこだよな。
キヨカがいる方向だけを除いて、ひたすら風を放っていく。
力の無駄遣いというか、効率は悪いけど、俺の実力だとこれが限界だ。これだけ放つのも、そろそろきついんだよな。

「ちくしょう。当たれってんだよ」
　何発も何発も放っているけど、一発たりとも当たっていない。
　手応えはないのはいいんだけど、当たっている反応もない。
　音は相変わらず流れるように聞こえてくる。
　ちくしょう。どれだけ速いんだよ。
　俺の風が、悉くかわされてるってのは、単純に俺の実力不足もあるけど、蟲(ベステート)の速さが尋常じゃないのもある。全く捉えられない。
　蟲(ベステート)も俺の攻撃を見切っているのか、完全に避けているようだ。見る事さえできれば、なんとかできるかもしれないけど、やっぱり音だけだと厳しい。
　それにしても、蟲(ベステート)はどうしてこんな事を繰り返してるんだ？
　もしかして、俺をからかってるのか？
　そんな知能があるんだろうか。
　でも、そうでも考えないと、こんな風にしている意味がわからない。
　だって、蟲(ベステート)は封印されまいと逃げているんだろ。それって、俺たちが勝手に思ってるだけだったりするのか？
　封印から解放されて、あちこちに散らばって、自由にできるんだから、戻りたくないって……いや、そういう知能もないのか。
　ただ本能で、世界を移動しているだけだろう。世界に与える影響も、蟲(ベステート)が自覚しているとは思えない。
　それは、存在そのものがそういう性質であって、意思なんて関係ないんだろう。
　だったら、これはなんだ？
　この蟲(ベステート)は、どういう理由でここにいて、こんな事を繰り返してるんだ？
　だって、封印されるリスクを犯してまで、ここにい続ける理由も、それが本能であったとしても――いや、そういう意味のない、むしろ危険性が高い事が本能のはずがない。
　これって……じゃれてるのか？
　こいつはもしかして、俺に遊んでもらってるとか、そういう事を……。
　いやいや、それこそ考えにくいだろ。
　でも、そう考えるとしっくりくるんだよな……。
　とにかく、蟲(ベステート)の心理なんてどうでもいいんだよ。とにかく封印しないといけないんだ。
　そのために、蟲(ベステート)の心理を勉強した方がいいと言われるかもしれないけど、行動も性質も全く異なるものを、その度に観察しているわけにもいかない。
　戦いながら、その場で知っていくのがセオリーだろう。
　それだって、一気に倒して封印できれば、その必要性はなくなる。
「それにしても、さっさと当たれ！」
　こうやって、風を放つのも大変なんだぞ。
　雨に濡れて、体も重い。それに、なんだか冷えてきた。

　このままだと、完全に風邪をひいちゃうだろうな。俺もだけど、キヨカも危ない。いくら元気娘でも、あの状態で放置されてれば、風邪をひかないわけがない。
　そんな事を考えると、寒気がしてきて、頭が痛いような気がしてくる。
　病は気からってホントだな。
　ぶんぶんと頭を振って、その考えを振り払う。それと一緒に、髪の毛の水分も飛んでいく……が、すぐにぐしょ濡れになってしまう。
「はっ！　くそっ！」
　あまりに当たらなさすぎて、だんだん意地になってきた。
　どうして当たらないんだよ。
　俺としては、蟲(ベステート)が移動するだろう場所を予想して放っている。その瞬間に聞こえた場所だと、絶対に当たるはずもないからだ。
　それなのに当たらない。
　蟲(ベステート)は微妙に方向を変えて、俺の攻撃を避けている。
　ちくしょう。
　完全に力の無駄遣いだ。全く効果が得られていない。
　ただ疲労だけが蓄積されている。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
　雨に打たれながらってのはきついな。
　風伯を振るのだって、かなり体力を使うのに、さらに雨が奪っていく。
「もう……ダメだ」
　がっくりと膝をつく。
　ぴちゃりとが冷たい。
　これ以上は戦えない。
　そんな力が残っていない。
　ごめん、キヨカ。俺だけじゃ無理だった。
　なんとかしたかったけど、やっぱり俺じゃ力不足だったみたいだ。
　蟲(ベステート)が移動しているであろう音は、今も聞こえ続けている。
　こうなった今となっては、その音が本当に蟲(ベステート)のものなのかも疑わしい。
　もしかしたら俺は、そこにはなにもないのに、風伯の力を放って、勝手に疲れているだけかもしれない。
　その可能性だって否定できない。
「だとしたら、とんだ莫迦(ばか)野郎だな」
　笑えもしない。
　そうじゃない事を祈ろう。
　とにかく、俺にはもう戦う力は残っていない。
　このまま撤退するか。
　それとも蟲(ベステート)が移動してしまうか。

どちらにせよ、もう俺に蟲(ベステート)を倒す事はできない。同時に、せっかくの機会を不意にしてしまう。
……だけど、どうすればよかったんだ？
見えない相手。速くて追いつけない相手。そんな相手に、俺はどう立ち向かえばよかったんだ？
まあ、正解なんてないんだろうけどさ。最善策ってのがあったら、教えてもらいたいもんだ。
どのみち、今の俺の実力じゃ、とてもじゃないけど実行できないだろうな。
「もう、どうにでもなれ」
諦めの言葉がこぼれる。
諦めたらそこで終わってしまう。
そんなのわかってる。
だけど、どうにもできない事だってあるんだ。実際、どうにもできないんだ。
俺だって、諦めたくて諦めるわけじゃない。
それしか、選択肢が見つからなかったんだ。
すまん、キヨカ。
ごめんなさい、神様。
本当に申し訳ない、世界。
謝っても、どうにもならないのはわかってる。
だけど、俺にはこれ以上はできそうにない。
風伯を握る力もなくなってきた。
「風伯……赦してくれ」
風伯を水に落としてしまう。
「もぅ、ダメだ……」
濡れるのも気にならない。そんな事を気にしている余裕はない。そんな事はどうでもよかった。そもそも、既に雨で濡れまくってるからな。
そのまま、前に倒れ込む。
ぱしゃんと水音が響いた。
ああ、冷たいや。
それに、しょっぱい。

(C)2013-2014 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

⑧

「トールちゃん。トールちゃん、起きてよ」
　ん？　雨が止んだのか？　雨の感覚がなくなっている。冷たいのは変わらないけど、それは地面が水浸しなんだからしょうがない。
　なんだか、頭がぼんやりする。それだけじゃなくて、目を開けるとくらくらする。
　どうしたんだろう？
　なんだか、体が火照っているみたいに熱い。
「トールちゃん、起きて。そんなとこで寝てたら大変だよ」
　キヨカの声に、上半身を起こす。
「あっ」
　立ち上がろうと手で地面を押そうとして、思ったように力が入らず滑ってしまう。
　転んで頭を打つ事は、なんとか免れた。
　どうなってるんだ？　もう一度、支えようとしても力が入らない。
「おろ？」
　支えようとしても、肘が曲がってしまう。
「トールちゃん、大丈夫？」
　キヨカが腋の下から手を入れて支えてくれる。
「すまん」
「いいよ。ほら、立とう。せーのっ」
　キヨカの声に合わせて力を入れようとするが、それでも入らない。
「きゃっ」
　逆にキヨカを引っ張ってしまい、キヨカが俺の上に倒れ込む。
　……なんだか、漫画なんかでよくあるよな、こういうシーン。まさか、自分が経験する事になるなんて……。でもまあ、こういうのって上下逆だよな、普通。
　っていうか、そんな事よりも、どうしちゃったんだろう。体に全く力が入らない。
「いてて……。ごめん、トールちゃん」
　そう言うキヨカは、なんだか顔が赤かった。
「いや、俺は大丈夫だ」
　そう答える俺も、顔が熱い。っていうか、体中が熱い。
　冷たい水の上にいるはずなのに、火照っているというか、汗をかくくらいに熱い。
「キヨカは……あっ」
　ぐにゃりと視界が歪んだ。
　あ……れ？
　頭もぼんやりするというか、痛みまで。
「トールちゃん、大丈夫？」
　心配そうに訊いてくれるキヨカだが、どうも視点が合っていないような気がする。

　もしかして、キヨカも？
　この雨の影響か？　この雨には、人体に害がある成分でもあったのか？
「トールちゃん、私……なんか変」
「おい、しっかりしろ。……ったく、どうなってるんだよ」
　せめて俺がしっかりしないと……と思うが、俺だって余裕がない。
　どうしたらいい。
　熱くて痛い頭で、なにかないかと考える。
　このまま、ここに倒れ込んだまま眠りたい。だけど、そんな事をしたら、きっと目を覚ませなくなる気がする。
　なにか手はないのか。
　俺がキヨカを運べればいいんだけど、自分の体すら自由にできない。
　そんな俺に、なにかする事はできないんじゃないか。
　手詰まりか。
　ここで、このまま……。
　ふと前の世界を思い出した。
　雪の中に沈んでいって、その時も同じような事を考えたっけ。
　これも一種の走馬燈なのかな……。
　あの時は、ヒナゲシさんとリュウドウさんが、狼(ルーポ)と一緒に助けてくたけど、この世界に二人も狼(ルーポ)もいない。
　俺たちを助けてくれるのは、もう……。
「おい、キヨカ」
　完全に気を失う前に、なんとかしないと。もしそうなったら、完全にここで俺たちの旅が終わる事になる。
「おい、キヨカ」
　苦しいのはわかるけど、このまま眠ってしまったら大変だ。
「……ん？　なに？」
　目を開けるのもつらいんだろう、うっすらと目を開けて、顔を向けてくる。
「キヨカ、蜘蛛(アラネーオ)を召還してくれ」
「アー……ちゃん？」
　意識が朦朧(もうろう)としているんだろう。
「アーちゃんが、ろうしたろ？」
　呂律が回らなくなってきている。
　やばい。
　このままだと、共倒れもいいとこだ。
「とにかく、蜘蛛(アラネーオ)を。頼む」
　少しでも意識があるうちにしないといけない。
「……うん、わかっら」

　ますます言葉が怪しくなってきた。
　ぼんやりとしたまま、ゆっくりと左手のオープンフィンガーグローブを外す。といっても、かなり手こずっている。手に力が入らないんだろうな。
「キヨカ……俺も手伝う」
　かえって邪魔になるかもしれないけど、今のキヨカよりはマシじゃないだろうか。
「トールちゃん、ありがと」
　なんとかグローブを外すと、キヨカは手の甲に八角形の対角線を描き、その先を繋いでいく。
「アーちゃん……出てきて」
　かっこいい決め台詞なんか、言っている余裕は全くない。本当なら、呪文みたいなのがあるけど、別に絶対というわけでもないみたいだな。
　キヨカの召還に応じて、蜘蛛(アラネーオ)がその姿を現す。
「トールちゃん、アーちゃん……だお」
　そう言うと、キヨカはその場に倒れる。力を使いきったようだ。
　キヨカの意識がまだあるのか、それとも気を失っているのかわからないけど、蜘蛛(アラネーオ)は出現したままだ。
〝状況説明を求む〟
「すまん。とにかく、俺たちを雨が凌げる場所まで、運んでくれないか」
　悪いが、状況を説明しているような余裕は一切ない。
〝……了承した〟
　蜘蛛(アラネーオ)は一瞬、逡巡したのだろうか。それでも、了承してくれた。
　蜘蛛(アラネーオ)はキヨカに向かって糸を吐く。
　キヨカは、あっという間に、蜘蛛(アラネーオ)の糸でぐるぐる巻きにされた。全身を糸で覆われ、まるで繭のようだ……。いや、俺たちは人間だからミイラみたい、の方がいいんだろうか。
　おいおい、もしかして……。
　そう思うやいなや、今度は俺に糸を吐きかけてくる。
「おっ、まっ、ちょっ……」
　抵抗しようにも、体に力が入らないので、結局されるがままになってしまう。それに、糸を巻き付けられて、すぐに身動きがとれなくなってしまう。
　俺たちをぐるぐる巻きにした蜘蛛(アラネーオ)は、今度は俺たちの荷物をぐるぐる巻きにし始める。
　糸で覆われているのに、少しだけ外の様子がわかる。どうやら、ぐるぐる巻きだけど、少し隙間があるらしい。もしくは、かなり薄い膜状になっているだろう。
　そうでなきゃ、息ができないし。
　なんだか、糸に巻かれてるのっていいかもしれない。なんだか温かいし、気持ちいいかも。
　荷物もぐるぐる巻きにした蜘蛛(アラネーオ)は、俺たちを背中に乗せる。
　背中の俺たちを固定した蜘蛛(アラネーオ)は、かなりのスピードで移動し始める。だけど、不思議と揺れがない。なので、最初は移動しているのかどうか、わからなかったくらいだ。

糸に巻かれているお蔭で、雨を防げている。
濡れなくなったせいだろうか、それとも体が火照っているせいだろうか、急に眠くなってきた。

(C)2013-2014 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

がばっと体を起こす。
「……？」
あれ？
俺はさっきまで、あの広い大地にいたはずだ。
蟲(ベステート)を封印して、雨がやんで、あの素晴らしい虹を見て……。
……あれ？
目の前には、天井がある。
白い天井があって、遠くからは雨音が聞こえてくる。
「……ここは……」
自分の体を見る。
「うわっ」
思わぬ状況に、変な声が出てしまう。
俺はなにかにぐるぐる巻きにされていた。
「なんだ、これ……」
自分に巻かれているものに触る。
特にネバネバしているわけでもない。どちらかといえば、さらさらしている。
なんだこれは……。
まるでなにかの糸のような……。
そこで、はっとなる。
「蜘蛛(アラネーオ)の糸か？」
それを裏付けるように、傍には蜘蛛(アラネーオ)がいた。
「うわっ、どうしたんだ……」
目を覚まして、蜘蛛(アラネーオ)の姿を唐突に見たら、誰だって驚くだろう。いくら何度か見ているといっても、なかなか慣れるものじゃない。
「どうなってるんだ？」
思考がついていかない。これは、どうなったってんだ？
体はだるくて、なんだか熱い。力も入らない。
〝目を覚ましたようだな〟
「っ！」
予想もしなかった声に驚く。
冷静に考えたら、なんの不思議もないんだが、その時はそういう可能性を考えられなかった。
誰の声か一瞬わからなかったが、それが蜘蛛(アラネーオ)の声だと気付く。
「蜘蛛(アラネーオ)、これはどうなってるんだ？」
この状況を説明できるのは、蜘蛛(アラネーオ)しかいないだろう。キヨカは……。
そうだ、キヨカは。

「蜘蛛(アラネーオ)、キヨカは！　キヨカは無事か！」
　思わず声が荒々しくなってしまう。
〝冷静たれ　資格者(ティトーロン)は　無事なり　現在　休養中なり〟
「どこにいるんだ？」
〝汝の近く　周囲を確認せよ〟
　蜘蛛(アラネーオ)に言われるまま、自分の周囲を見る。
「……どこに……って、あれか」
　周囲を見ていると、白い大きな繭のようなものが見えた。もしかして、これがキヨカなのか。
「蜘蛛(アラネーオ)、あれがキヨカなのか？」
〝そうだ〟
　端的に答える。
「キヨカは無事なんだよな」
〝資格者(ティトーロン)は無事だ〟
「そっか……。よかった……」
　蜘蛛(アラネーオ)が嘘を吐く理由はない。その場凌ぎの誤魔化しもないだろう。だとすれば、蜘蛛(アラネーオ)が言っているのは、まぎれもない事実。
　キヨカは無事だって事だ。
「なあ、どうなってるんだ。よければ、教えてくれないか」
　頭が重くて痛い。
　目が覚める前の記憶があやふやだ。
　それに、あの夢のせいで、なにが現実で、なにが夢なのかわからない。
　そもそも、これは夢じゃなくて、本当に現実なんだろうか。夢の中で、また夢を見ている可能性だってあるはずだ。
　痛みなんかじゃわからない。夢の中でだって、痛みくらいは感じる。
　だから、今の状態でその判断はできない。
　個人的には、さっきの夢が現実だったらよかったのに……と思ってしまう。
　あれが夢だとするなら、おそらくまだ蟲(ベステート)は封印されていない。そして、この世界には雨が降り続いている。
「教えてくれ。頼む、蜘蛛(アラネーオ)。順に教えて欲しいんだ」
〝了承した　汝に　事のあらましを伝えよう〟

(C)2013-2014 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　話を聞くに、どうやら気を失ってしまった俺たちを、蜘蛛(アラネーオ)が運んでくれたらしい。
　雨を防ぐために、糸でぐるぐる巻きにして。
　そのお蔭で、雨もしのげたし、体を冷やす事もなかった。
　そうして、蜘蛛(アラネーオ)は俺たちが最初にいた、崩れそうな建物まで戻ってきた。そこしか、雨をしのげそうな場所がなかったそうだ。これだけ見晴らしがいいって事は、遮るものがないって事だもんな。
　そういうわけで、雨宿りのためにここまで運んできたらしい。
　しかし、この建物自体が心許ないので、蜘蛛(アラネーオ)が糸を使ってドームのようにしたらしい。
　そのせいだったのか。雨音が少し遠く感じられたんだ。
　この建物を基礎として、糸で覆ったお蔭で、雨はおろか、気温も下がる事なく、いい感じになっていた。
　俺たちも、蓑虫のような状態になっていたので、体を冷やさなかった。
　それでも、ずっと雨に打たれ続けていた事と、旅の疲れもあって、完全に体調を崩してしまったわけだ。
　事実、熱っぽいし、体はだるい。
　……風邪だろうな。
　滝のような雨に打たれ続けて、風邪をひかない方が不思議だろう。当然といえば当然の結果だ。
　おそらく、キヨカも同じだろうな。途中で力尽きて、雨に打たれまくったわけだし。
　同じ環境なら、同じ症状だろうな。
「それにしても、ちょっと楽なんだよな」
　ただ眠っていただけだ。俺はずっと気を失っていたわけだからな。
「どういう事だろう」
　そう独り言ちると、蜘蛛(アラネーオ)が教えてくれた。
〝資格者(ティトーロン)が　汝に薬物を投与せり〟
「……薬物？」
　いったいなにを言っているのかと思ったが、きっと風邪薬の事だろうな。
　旅の必需品として、その程度は持っていたはずだ。
　って事は、キヨカは自分も体調が悪いのに、俺の看病をしてくれたって事か。
　キヨカをちらりと見る。まあ、糸にくるまれていて、姿は見えないんだけどな。
　だけど、蜘蛛(アラネーオ)がこうしているって事は、無事だって事だ。そこは安心できる。
　だけど、そういう状況で、俺に風邪薬を飲ませてくれるなんて、すごすぎるだろ。
　こういう時って、やっぱり女の方が強いよな。男だと、こうはいかない。
「なあ、キヨカも薬を飲んでたよな」

〝否　資格者(ティトーロン)は服薬せず〟
「……」
おいおい。
どういう事だよ。
何気なく訊いたら、予想外の答えだぞ。どうして、キヨカは飲んでないんだよ。
「どういう事だ？」
〝我　解せず〟
「……」
結局わからないってか。キヨカに訊くわけにもいかないしな……。
だけど、風邪薬を飲んでないなんて、キヨカは大丈夫……なわけないよな。
風邪薬になにかあったのか？　新品だったはずだぞ。
俺に飲ませた後、力尽きたとかなのか？　それならわからなくもないが、それにしたってキヨカは大丈夫なのか？　体力だって低下してたろうし……。そもそも、走り疲れて倒れてたんだぞ。そんな状況で、さらにあの豪雨だ。なにもないはずがない。
だけど、蜘蛛(アラネーオ)の糸にくるまれているのを見るに、大丈夫そうなんだよな……。
資格者(ティトーロン)のキヨカが危険なら、さすがの蜘蛛(アラネーオ)だって平然とはしていられないんじゃないだろうか。それくらいの感情はあるだろう。そう信じたい。
さて、この状況でどうしたものかね……。
キヨカに対して、なにをしてやれるわけじゃない。
〝汝　休養せよ〟
「ん？」
ああ、蜘蛛(アラネーオ)か。
休養……ね。
そういやそうだな。
蜘蛛(アラネーオ)に言われて、ようやく気付いたよ。
俺だって、体調が万全なわけじゃない。つうか、むしろ眠い。
頭は痛いし、体はだるいし、それもあって体が休めと叫んでいる。
ゆっくり休もう。
今の俺には、なにもできる気がしない。
「蜘蛛(アラネーオ)、あとは頼んだ」
〝了解した〟
その声を、薄れゆく意識の中で聞いた。

(C)2013-2014 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

心の歌を奏でて　ー神の涙ー　㊤

http://p.booklog.jp/book/48887

著者：芳田尚哉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/48887

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/48887

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ